

## 【巻頭言】 附属学校教育局長 尾白泰次 「附属学校群のさらなる進化」

- 2 共生シンポジウム -共生社会を目指すつくばふぞくの集い- ——— 齋藤 豊
- 3 令和7年度 卒業研究発表会を開催しました ——— 渡邊和彦
- 3 地域とのつながりをはぐくむ地域清掃 ——— 数馬梨恵子
- 3 令和7年度 教育実習、研究授業 終了 ——— 濱田 淳
- 4 附属高等学校 沖縄修学旅行 ——— 塩飽りさ
- 4 きらきらコンサート2025 ——— 星名紫希
- 5 【視覚】高2沖縄修学旅行 ——— 平野祐希子
- 5 水俣で深める探究の基礎 ——— 安藤嵩輝
- 6 触媒としての異学年交流 ——— 志田正訓
- 6 挑戦! 白熱! 桐が丘スポーツ大会 ——— 小林 豪
- 7 大塚祭 —オリンピック・パラリンピック教育を通して— ——— 杉田葉子
- 7 両校の心つながり交流会 ——— 木村百合子
- 8 第20回 筑波大学朝永振一郎記念「科学の芽」賞表彰式・発表会開催 ——— 梶山正明



筑波大学  
University of Tsukuba

「リンクのせかいとつながりのせかい」



附属桐が丘特別支援学校 小学部 2年児童  
「おはながみ かさねて すかして」

「カラフルアイランド」



「こせ」

# 附属学校群のさらなる進化

附属学校教育局次長 尾白泰次



OJIRO  
YASUJI

文部科学省は「国立大学法人等の機能強化に向けた検討会」を設置し、今後の機能強化の方向性について令和7年8月に「改革の方針」をとりまとめました。また、文部科学省は「改革の方針」を踏まえ、令和7年11月に「国立大学法人等改革基本方針」(以下「基本方針」という。)を策定し、第5期中期目標期間(令和10~15年度)に向けた組織業務や運営費交付金等の具体化をはじめ、国立大学法人等の改革を推進することとしています。基本方針では「附属学校について、各法人のミッション・機能強化の方向性、社会からの期待を踏まえた在り方の検証や、設置される附属学校の数、種類、規模等についての整理と必要な見直し」といった改革が各国立大学法人に対して求められています。

筑波大学附属学校群としては、昨年度策定した「筑波大学附属学校群ミッション」に基づき、時代の変化に対応し附属学校群のさらなる進化を図る改革に取り組んでいます。

【文部科学省WEBサイト】

国立大学法人等改革基本方針

[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/houjin/1418126\\_00003.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houjin/1418126_00003.htm)



## 共生シンポジウム

—共生社会を目指すつくばふぞくの集い—

附属久里浜特別支援学校長 齋藤 豊

令和7年12月13日(土)、桐蔭会館にて「共生シンポジウム—共生社会を目指すつくばふぞくの集い—」が開催されました。小・中・高等学校6校と特別支援学校5校、計11校の附属学校の児童生徒が、障害の有無や年齢の違いを超えて交流する場の一つとなっています。当日はオンライン参加も含め、児童生徒や保護者など約150名が参加しました。

シンポジウムは2部構成で行われました。第1部では、脚本家・演出家として活躍し、障害のある俳優への演技指導も行っている藤井清美氏をお迎えし、ご講演いただきました。



第1部 講演の様子

夢の実現に向けて努力されたご自身の経験や、演技指導を通して感じたことなど、心に響くお話が続きました。また、障害当事者である3名の俳優さんによる劇も披露され、会場から大きな拍手が送られました。

第2部では、令和7年10月12日(日)に実施された「つくばふぞく交流会」での体験をもとに、生徒実行委員や各校代表の児童生徒が発表を行いました。実行委員からは、企画準備で工夫した点や活動の成果・課題について報告がありました。各校代表からは、さまざまな障害のある人と触れ合う機会の大切さや、「自分にもできることがある」という気づきなど、率直な思いが語られました。

障害の有無や年齢の違いを超えて交流し、共生社会について考える貴重な時間となりました。今後も、児童生徒が互いを理解し合い、支え合う心を育む機会を大切にしていきたいと思います。



第2部  
各校代表発表の様子



支え合い  
・誰か一つの手  
・誰か一つの手  
・支えあって  
・支えあって  
・支えあって  
・支えあって



## 令和7年度 卒業研究発表会を開催しました

附属坂戸高等学校 教諭  
渡邊和彦

令和7年度卒業研究発表会が11月28日(金)に本校で開催されました。本校の卒業研究は、専門学科時代の「課題研究」の取り組みが、総合学科の原則必修科目(当時)に引き継がれ、現在に至ります。本年度の卒業研究は、これまでの実践を振り返り、その理念を「三年間の学びの総括として教科・科目の学びを統合すること」、「探究活動を通じて、自己の在り方・生き方への考えを深めること」に集約して指導してきました。発表会当日は、教科・科目等の学びから着想した個性的な研究テーマ、将来のキャリアを見据えた制作活動など、生徒が1年間かけて取り組んできた多種多様な成果を、在校生・保護者の皆様と共有することができました。今年度の卒業研究は、地域、大学教員の方のご支援も頂き、充実した研究活動となりました。ご協力いただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



分科会での発表会の様子



## 地域とのつながりをはぐくむ地域清掃

附属聴覚特別支援学校 中学部 教諭  
数馬梨恵子

中学部では、令和3年度より地域清掃を行っています。本校のある市川市国府台は、春は桜、秋は紅葉を楽しむことができます。しかし、季節によっては通学路に落ち葉などが目立つようになります。そこで、「みんなで学校周辺の地域をきれいにしよう」という役員会の声から、年2回の地域清掃が始まりました。令和7年度には、本校のお隣りにある和洋女子大学の「さとみのつちぶサークル」の先生からお声がけいただき、腐葉土ステーションを作るための落ち葉をお渡ししました。そして、このつながりから「さとみのつちぶサークル」の皆さんと合同での地域清掃への取組も始まっています。

生徒の声から始まった活動が今、広がりを見せています。これからも生徒の「誰かのために」という気持ちを大切に、教育活動を充実させていきたいと思ひます。



暑さに負けず、取り組みます



上級生を中心に、協力して活動しています



## 令和7年度 教育実習、研究授業 終了

医療科教員養成施設 講師  
濱田 淳

令和7年10月下旬に実習オリエンテーションから始まった教育実習が12月1日に終了しました。本施設は文部科学省が指定した特別支援学校自立教科(理療)の教員養成機関です。そのため、毎年卒業学年である2年生が、附属視覚特別支援学校鍼灸手技療法科の先生方のご指導の下、視覚障害のある生徒にわかりやすい授業を行うことを目指し、実践の場で学修します。例年実習最終日には「研究授業」が行われます。今年度は実習生数が少なく2グループとなり、マンパワー面での負担が大きかったかもしれません。この「研究授業」は複数の実習生が担当実習生を支援するという協働活動で、実習生にとっては、当該学修の総括であり、教育的研究あるいは実践研究のキャリアスタートになります。今回は教材開発ではなく、指導法の工夫でした。

診察学における協働学習と接遇意識を育てる授業をテーマとし、ゲーム感覚「デュエル」を採り入れた徒手検査法指導と、栄養素(特にビタミン)の学習時に実物を感覚すること、あるいは「実見、実感」を重視した認知促進を採り入れた授業でした(写真1)。実践後、この研究授業の振り返りを行う「合評会」が開かれました(写真2)。ここは研究授業の評価、考案、感想を陳べ合う場です。生徒の実態を把握し、それに即した指導・支援の方法を検討し実践するという教育実習は、新年度に視覚特別支援学校の教壇に立つ実習生にとって、何にも代えがたい宝となったはずで、視覚障害者の職業自立を支援するために、全国で活躍してくれることを祈念しつつ筆を置きます。



写真1:学習するビタミンを含む食物が机上に用意されている(奥の方、紙コップに入れられている)



写真2:合評会で研究授業を振り返る

## 附属高等学校 沖縄修学旅行

附属高等学校 教諭 塩飽りさ



伊江ビーチにて

2学年は、令和7年11月27日から4泊5日の日程で沖縄修学旅行を実施しました。本学年では、高校生である今だからこそできる経験を重視し、平和学習と民泊体験を軸としたプログラムを設定しました。

1日目～2日目午前の平和学習では、沖縄県営平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館、糸数壕、対馬丸記念館や旧海軍司令部壕を訪れました。生徒は事前に、本や映画、修学旅行委員によるプレゼンを通して沖縄戦について学んでいましたが、実際に現地で資料を目にし、ガイドの方の解説を聞くことでさらに理解を深めたようです。特に糸数壕では、日本軍の陣地壕や陸軍病院として使われていた当時の状況について説明を受けながら、暗いガマの中を自らの足で歩き、沖縄戦を追体験することができました。

2日目午後には伊江島に渡り、2泊3日の

民泊体験を行いました。島のシンボルである城山などの名所巡り、伝統舞踊やサーターアンドギー作り等、各家庭でさまざまな体験をさせていただきました。美しい自然と穏やかな時間の中で、島の方々の温かさに触れた3日間は、生徒たちにとって忘れがたい思い出となりました。

4日目午後には本島へ戻った後は、コース別体験（マリン体験、マングローブカヤック、サイクリング、サトウキビ刈り、漆喰シーサー作り）を楽しみ、夜には修学旅行委員企画のナイトレクで盛り上がりました。最終日には、那覇市内で班別研修を実施しました。

観光地としての沖縄のみならず、その歴史と現在、そして豊かな文化を肌で感じることできた、実りある修学旅行となりました。

民泊の離村式で、民家さんに教えていただいた三線と歌を披露



コース別体験でシーカヤックに挑戦



## きらきらコンサート2025

附属久里浜特別支援学校 教諭 星名紫希



「トジャングルベル」の演奏を聞き入る幼児（幼稚部）

令和7年12月16日（火）、ピアニストの谷川賢作さんとパーカッションの安井希久子さんをお招きし、本校の第2プレイルームにて、「きらきらコンサート」が行われました。きらきらコンサートは、2009年頃から始まっており、お二人が演奏するきらきらコンサートは今回で11回目となりました。

今年のきらきらコンサートは、「クリスマス」をテーマに、幼稚部30分と小学部40分の二部構成で行いました。幼稚部では、ジャングルベルやあわてんぼうのサンタクロースなど、幼児にとってなじみのある曲を演奏させていただきました。幼児は、演奏を見聴きしながら、持参した楽器を鳴らしたり、パーカッションや鍵盤ハーモニカなどに興味をもって近付いたりするなどの様子が見られました。小学部では、赤鼻のトナカイやきよしこの夜などの曲を演奏させていただきました。児童は、音楽の授業などで事前に学習した曲と一緒に演奏したり、軽快な曲が始まると、立ち上がってリズムに乗って自

由に体を動かしたりして音楽を楽しむ様子が見られました。

コンサートや演奏会に参加することが難しい幼児・児童も、学校という慣れた場での開催や、なじみのある曲や授業で取り扱った曲を演奏することなどで、それぞれの楽しみ方で参加することができました。また、小学部の児童からは「また来てね。」という声が聞かれ、来年のコンサートを楽しみにしている様子もうかがえました。

自然と体が動いて、曲を楽しむ児童（小学部）



## 【視覚】高2沖縄修学旅行

附属視覚特別支援学校 教諭 平野祐希子



イルカの観察

本校高等部2年生は11月24日～27日の4日間、沖縄で修学旅行を行いました。平和学習・文化体験学習・自然学習・テーマ別の班に分かれた自由行動の4つの活動が軸です。

1日目は南風原文化センターを訪れ、実際の陸軍病院壕や、女子学徒が食糧を運ぶために駆け上がった「飯上げの道」を歩き、戦争遺物にも触れました。2日目には座波次明元沖縄盲学校教諭の案内で南部戦跡をめぐるしました。生徒からは「戦争は過去ではなく、今を生きる私たちが向き合うべき現実だと感じた」「一人一人の苦しみや思いが伝わり、平和が多く犠牲の上に成り立っていることを実感した」などの声が寄せられました。

大学生サークル「琉球風車(かじまやー)」によるエイサー体験では、マンツーマンで指導を受け、1時間ほどで曲に合わせて踊れるまでに上達しました。「むら咲むら」ではサーターアンダギー作りと黒糖作りを体験し、沖縄の伝統文化に親しみました。

3日目は海洋博公園内の熱帯ドリームセンターで植物を観察し、美ら海水族館ではサメの骨やイルカに触れて学ぶ特別プログラムに参加しました。南国でしか見ることのできない珍しい植物に生徒たちは興味津々でした。またイルカの観察では、最初はおそろおそろ触れていた生徒も、次第にその可愛らしさに笑顔を見せていました。

4日目はテーマ別行動で各班での学びを深めた後、空港に集合して帰路につきました。今回の修学旅行は、歴史を知り、文化に触れ、自然と向き合う中で、多くの気づきと成長を得る貴重な4日間となりました。

ひめゆり学徒隊が最期にたどり着いた場所へ



ソーセイジノキの葉の観察

## 水俣で深める探究の基礎

附属駒場中学校 教諭 安藤嵩輝



今年度の参加者

本校では高校2年生の「総合的な学習の時間」として「課題研究」を設定しており、様々な教科が開講する講座から選択して自ら課題を設定し研究する活動を行っています。その中で、地歴公民科では毎年、「水俣から日本社会を考える」という講座を開講しています。この講座は本校のSSH指定をきっかけに「科学者の社会的責任を考える」授業の1つとして始まり、今年度で16年目を迎えました。水俣病問題に長年取り組んでいらっしゃる大野新先生(中央大学特任教授、本校元副校長)をお招きし、1学期の間、水俣病に関する基礎的な知見を学習した後、自分の研究テーマを設定して取材先や取材内容を決め、夏休みの現地フィールドワーク(3泊4日)に臨みます。そして2学期以降にフィールドワークの成果を相互に発表、検討して報告書を完成させています。

生徒が着目する観点は病理やリハビリ、民俗、法制度等、実に様々です。また現地で様々な関係者の方々と相対することで、生徒たちの知識は複雑な現実の深みをもったものになっています。その結果、非常に多角的で多面的な深いレポートが毎年、生まれています。長年継続して実施する中で水俣の地域の方々と本校との縁も深まってきており、昨年度は地元メディアにも取り上げていただきました(くまもと県民テレビ「水俣病支援に“新世代”の光 旗に「怨」の文字掲げデモした時代から変わる支援のあり方、若者が共感抱くきっかけに」2024/9/18)。

SSH予算は無くなりましたが、昨年度はNPO法人Kokomaba FLAPからご支援をいただく等、生徒負担が重くない形での継続を模索しています。



関係者への取材(昨年度の様子)



過去の報告書

# 触媒としての異学年交流

附属小学校 教諭 志田正訓

キウイの収穫を手伝う5年生



東京都西東京市には、本校の「保谷田園教場」があります。毎年、全児童が訪れ、自然に直接触れる経験を通して、普段の校舎で学ぶ教科や領域の学習とは一味違った学びが展開されます。ここでの活動は、単に自然の恵みを楽しむ、自然への畏敬の念を忘れないようにする学習にとどまりません。ここに常駐し、野菜等の栽培も管理してくださっている作り手の存在を感じ、その方との直接の交流を通して、他者意識の芽生えを促す学習効果もあるといえるでしょう。

令和7年11月。1部3年と1部5年の2学級が「保谷田園教場」にて活動を行いました。異学年での交流です。両学級の児童でベアをつくり、サツマイモを掘ったり、キウイを収穫したり、焼き芋を焼いたり、ピザ窯でピザを焼いたり、共に遊んだりしながら交流を深めていきました。3年生の児童が掘れないサツマイモを、5年生の児童が代わりに掘ってあげたり、3年生の児童が届かないキウイを5年生が抱っこをして、届くようにしてあげたりと、5年生の児童は、3年生のための思い、助けることを通して、相手を思いやる気持ちの涵養にはげんでいました。

一方、3年生の児童も、お世話になりっぱなしではありません。すでに1部3年の児童は、以前に訪れた際に、ピザ生地をつくり、ピザ窯でピザを焼くことをはじめとした様々な経験があります。このような経験を5年生の児童に伝えることを通じて、楽しさを共有していました。

これらの活動を通じて、最初に述べた他者意識の芽生えも、加速度的に深まっていきました。異学年交流というのは、教育的効果をさらに高めるための触媒という側面があるのではないのでしょうか。



3年生と5年生でピザをつくる様子

楽しさを共有する



# 挑戦! 白熱! 桐が丘スポーツ大会

附属桐が丘特別支援学校 教諭 小林 豪

実行委員考案のチーム対抗バレーボール

令和7年6月7日(土)、筑波大学附属桐が丘特別支援学校において「桐が丘スポーツ大会」を開催しました。午前の部では、校内の各会場に分かれ、「ディスクゴルフ」「スポーツウェルネス吹き矢」「Tボール」「卓球バレー」「シッティングバレー」「ポッチャ」の6種目の中から、児童生徒が事前に選択した2種目に取り組みました。体育の授業で全種目を体験した上で、自分が挑戦したい種目を考えてエントリーしました。本番当日は、小学部から高等部までが一緒に活動し、学年の垣根を越えてスポーツを楽しむ姿が見られました。上級生が下級生に良いところを見せようと意欲的に取り組む様子や、それを見つめる下級生の姿など、異学年交流ならではの光景が印象的でした。



午後の部では、全校児童生徒が体育館に集まり、実行委員会の生徒が企画した「チーム対抗風船バレー」「チーム対抗なんでもドッジボール」を実施しました。司会進行や審判、ルール説明も実行委員が担当し、主体的に大会を運営しました。競技が始まると、児童生徒は真剣な表情で臨み、白熱した試合が展開されました。

このスポーツ大会を通して、自分の好きなスポーツや得意なことを見つけるとともに、異学年交流の楽しさを感じる機会となりました。今後も、児童生徒一人一人の様々な表情や素敵な姿が見られる大会にしていきたいと思えます。



スポーツウェルネス吹き矢



卓球バレー



## 大塚祭 —オリンピック・パラリンピック教育を通して—

附属大塚特別支援学校 高等部主事 杉田葉子

令和7年11月22日に大塚祭を開催しました。今年の11月は日本で初めて「東京2025デフリンピック」が開催される記念すべき年であるということで、9月のオリ・パラ交流会では、阿波踊りを通して聴覚障害に対する理解啓発に取り組まれている『だいこん連』の皆さんを招いて、阿波踊り交流会を実施しました。阿波踊りの踊りの手の種類や踊り方等を教えていただくと共に聴覚障害の方とのコミュニケーションツールとして手話があることを学ぶ機会にもなりました。

大塚祭の当日は、全校の幼児児童生徒が一堂に会して



オリパラ交流会 (9月)

オープニングが行われ、高等部の生徒たちも、阿波踊りとファッションショーでオープニングを盛り上げました。『だいこん連』の皆さんもスペシャルゲストとして

阿波踊りのお囃子に参加して下さいました。最後は、幼児児童生徒も一緒になって踊り大団円となりました。

みんなで太鼓

や鐘のリズムを身体で感じながら練り歩き、会場全体が活気と笑顔に溢れた大塚祭となりました。

コロナ禍以降、全校行事を一緒に楽しむ機会が減少する中、阿波踊りをみんなで楽しむことで心一つにしてくれたように感じました。改めて、日本の伝統文化の魅力を再認識すると共に、オリンピック・パラリンピック教育における自国の文化を誇りに思う気持ちや、多様な背景を持つ人々との交流へと繋げていきたいと考えています。



大塚祭オープニング(11月)



## 両校の心つなぐ交流会

附属中学校 教諭 木村百合子

令和7年12月8日(月)、附属視覚特別支援学校を会場に、同校中学部と附属中学校の生徒による交流会(交歓会)を実施しました。両校の生徒が混ざり合った少人数チームで、サウンドテーブルテニス、点字早打ち競争、ブラックボックス(箱の中身を当てるゲーム)、イントロクイズに挑戦しました。

交流会が始まり、チームに分かれた直後は、初めて顔を合わせるメンバーとどこことなく緊張した面持ちで自己紹介をしていました。しかし、ゲームが始まると会場の雰囲気は一変し、笑顔と歓声があふれる和やかな空気に包まれました。お互いの得意・不得意を自然に補い合い、励まし合う温かな姿が随所に見られました。「アニソンは得意だけど、

K-popは任せた!」

(イントロクイズ)、「点字を打つときは柵に沿ってやるとやりやすいよ!」(点字早打ち競争)、「こっち来た! 私が打つね!」(サウンドテーブルテニス)など、優しい声かけが飛び交い、ゲームを通じて心の距離がぐっと縮まっていきました。

閉会式では、両校の生徒が事前に心を込めて用意した点字の名刺を、笑顔で交換し合う姿が印象的でした。短い時間の中で芽生えた友情が、これからも続いていくことを願わずにはられません。企画・運営のほとんどを生徒たち自身が成し遂げた交流会、今後も継続的に実施することで、両校の生徒たちの学びと絆がさらに深まることを期待しています。



チーム内で点字名刺の交換



点字早打ち競争



サウンドテーブルテニスのダブルス試合



参加者で集まって集合写真

# 令和7年度 第20回筑波大学朝永振一郎記念 「科学の芽」賞表彰式・発表会開催 (2025.12.21)

附属学校教育局 次長 梶山正明

令和7年12月21日(日)、本学東京キャンパスにおいて、朝永振一郎記念第20回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。東京キャンパスでの開催は、20年の歴史の中で初めての試みでした。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりの深いノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校289校及び海外5か国7校（アメリカ、韓国、中国、ハンガリー、フランス）の日本入学校等から小・中・高校生部門合わせて2,522件の応募がありました。その中から小学生部門7件、中学生部門7件、高校生部門2件の合計16件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、第20回の受賞者22名と付添者40名が出席されました。

本学からは永田恭介学長、加藤光保プロボスト、竹中副学長、遠藤副学長、中内副学長、千葉副学長、大根田副学長、氷見谷副学長、歳森副学長、加藤和彦副学長、西尾副学長、呑海副学長、野手副学長、浅島理事、初貝数理物質系長、中田生命環境系長、野呂人間系長が出席し、本学と包括的連携協定を結んでいる三井住友フィナンシャルグループから松岡副部長にご出席いただきました。加えて、第20回を記念して参加を呼びかけた、これまでの「科学の芽」賞の受賞者（受賞OB・OG）と第11回の受賞者である講演者の田上大喜さん、「科学の芽」賞関係者、及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で110名を超える参加者数となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会委員の篠塚明彦附属学校教育局長補佐の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と盾が授与され、祝辞が述べられました。続く発表会では、小・中・高の部門毎に受賞者による発表と質疑応答が行われました。受賞者達は、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告し、大学の先生方や受賞OB・OGなど会場の参加者から質問や助言を受け、緊張しながらも真剣に回答していました。その後、今年初の試みとして、三井住友フィナンシャルグループ提供のSMBCシャカカチ賞が第20回「科学の芽」賞受賞作のなかから選出され、松岡副部長から授与されました。受賞者は、東郷有真さんでした。

最後に遠藤研究担当副学長から個別の作品へのコメントを含む全体総評があり、「科学の芽」賞実行委員会委員長である呑海副学長の閉会の挨拶により無事表彰式・発表会は終了しました。

その後は、第11回の受賞者である田上大喜さん（オックスフォード大学大学院博士課程）を講師にお招きして、講演会を催しました。講演では、「蚊の研究から遺伝子研究へ」と題して、蚊を4,000匹飼育した自身の「科学の芽」賞の受賞作の話に始まり、現在大学院で取り組んでいるヒトの遺伝子に関わる研究や医学への応用など将来の展望についてのお話があり、受賞者をはじめ参加者は真剣に耳を傾け、講演後は活発なディスカッションが行われました。その後は、3階学生ホールに場所を移し、受賞者を囲んで、学長・副学長をはじめ大学関係者、田上さんをはじめ受賞OB・OG、実行委員会委員らが参加した懇談会が行われました。附属大塚特別支援学校の「えがおカフェ」から提供されたお菓子と飲み物を楽しみながら、研究談義に花を咲かせ楽しく有意義な時間を過ごしました。

おわりに、今年度の「科学の芽」賞にご応募いただいた皆様、ご支援・ご指導くださった関係者の皆さまに深く感謝を申し上げます。また、初の試みであったクラウドファンディングを通じてたくさんのご支援を賜りました皆さまにも、受賞OB・OGをお招きして盛大に会が開催できましたことをご報告させていただくとともに厚く御礼申し上げます。第21回以降も、引き続き「科学の芽」賞をよろしく願い申し上げます。



## ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献上した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア  
paulownia

vol. 65

発行日………令和8(2026)年2月28日

発行者………附属学校教育局教育長 呑海沙織

発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌  
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン………スピーチ・バルーン

印刷………広研印刷 使用紙：U-limax [日本製紙]

